

ところ会 6 月行事案内

所沢を散策する：鎌倉街道上道とその周辺（新所沢～入曽）

新所沢駅から鎌倉街道の枝道「堀兼道」で堀兼神社まで行き、そこから入曽に出て鎌倉街道の本道「入間道」を歩きます。

記

■日 時：平成 28 年 6 月 17 日（金）

8:30 新所沢駅 改札口の外に集合

天候不良の時はろくす
けでのランチ会としま

■見学場所及び時間：コース全長約 9km

新所沢駅(8:35)⇒馬頭観音⇒勝軍地藏⇒念仏地藏・神山権右衛門の墓
⇒柳野遺跡⇒河岸街道・馬頭観音⇒八軒家大井戸⇒堀兼神社
⇒化け地藏⇒不老川川岸の散歩⇒昼食（ろくすけ）⇒野々宮神社
⇒七曲井⇒入間野神社⇒入間村役場跡⇒入曽駅
⇒所沢（到着予定時間 15：00 頃）

■昼食：ろくすけ（イタリアン） 12:00～13:30

ランチ B セット 1,620 円 税込み

■散策先簡単ガイド

以下のガイドは居田さんが高齢者大学で作成した「ビジュアル探訪・所沢を知ろう」を元に作成したものです。

【鎌倉街道】

所沢の鎌倉街道は本道の入間道の他に小手指道と堀兼道という枝道があります。所沢中学校の向かいに、斜めに新所沢駅方向に向かう細い道があり、これが堀兼道です。鎌倉街道の本道の入間道は現在の「県道所沢-狭山線」ですが、今回は新所沢駅から堀兼道を通して堀兼神社まで行き、そこから西に向かって入間道にでて入曽駅から所沢に戻ります。

鎌倉街道堀兼道は、新所沢駅周辺は開発でその跡が分からなくなっていますが、線路を越えて泉町の旧新所沢コミュニティセンター別館の脇からの細い道につながっています。



新所沢駅からの鎌倉街道



鎌倉街道を横切る砂堀川

【馬頭観音】

ラク所沢の斜め前、大字北岩岡側の角に小さな馬頭観音が立っています。車の交通量が激しいせいか多少損傷していますが、正面に「馬頭観世音」と文字が、また向かって右側面には「明治三年庚午」、左側面には「岩岡新田神山権右衛門」と刻まれています。神山(こうやま)権右衛門は後述する寺子屋の師匠と同一人物と思われる。



【北岩岡村】

大字北岩岡の前身の北岩岡村は、明治八年に北岩岡新田や北田新田などが合併してできたもので、二つの新田はそれぞれ山口地区と所沢地区の人々によって開発されました。市内の北部は江戸時代中期から後期にかけて開発された新田地帯で水利も悪く土地がやせており農作業は大変な苦労が伴ったものと思われます。このあたりは、明治時代の『武蔵野郡村誌』という本に「(土地は)色赤薄黒黄混交して質悪、諸植物に適せず。冬季暴風の時は土砂を巻き麦苗を吹埋む。故に土人風除をなし之お防ぐ」と書かれるほどの所でした。現在も所々に防風林を見ることができます。また風除のために畑の周囲に植えた畦畔茶が現在の茶園の源流でもありました。

【所沢新町】

所沢新町はもとの所沢新田で、所沢村の人々によって開発された新田です。

【勝軍地蔵】

小さなお堂にお地蔵様が二体祀られています。左側は「明和7所沢新田中」と彫られ、この近辺の人々によって祀られたものと分かります。このお地蔵様は兜をかぶり馬に乗っており「所沢新田 勝軍地蔵」と呼ばれるものです(1770年)。勝軍地蔵というのは悪業煩惱に打ち勝つ地蔵とされますが、防火の神の愛宕権現と同一で、防火、鎮火の後利益を持つことも多いお地蔵様です。右側の地蔵は天明二年(1782)の年号が彫られ、脇の看板に、流行病で亡くなった子供や老人の供養に建てられたという言い伝えが記されています。



勝軍地蔵は愛宕権現と同じ形をしており愛宕権現の本地仏とされています。日本の神々を仏教の仏が仮の姿で現れたものとする**本地垂迹思想**によります。**権**という文字は「権大納言」などと同じく「臨時の」「仮の」という意味で、**権現**は仏が「仮に」神の形を取って「現れた」ことを示す神号です。

【念仏地蔵】

テニスコートの一角に「岩岡村念仏講中」と刻まれたお地蔵様があります。安永七年(1778)の年号がある「岩岡の念仏地蔵」です。昔、新河岸川の河岸場に捨てられていたものを譲り受けて大八車でここまで運び祀ったものであると言い伝えられます。



【神山権右衛門の墓】

お地蔵さまの前にある共同墓地には、前述の馬頭観音の施主で寺子屋の師匠である神山権右衛門の墓があります。寺子屋の師匠の墓はその弟子によって建てられることが多く、この墓石の台石の正面にも「門人中」と彫られ、また側面、裏面にびっしりと門人の名が記されている歴史の貴重な資料です。

【神米金(かめがね)】

神米金は、明治七年に神谷新田、久米(平塚)新田、堀兼(堀金)新田が合併

して村に、その後富岡村の成立に伴って大字となりました。神谷新田は現比企郡吉見町の農民・神谷内蔵助により、また久米新田、堀兼新田は久米や堀兼村の人々によってそれぞれ拓かれたものです。これらの新田は現在の大字神米金の中で、西から堀兼新田、神谷新田、久米新田と並んでいましたが、街道がこの堀兼新田に沿うように折れているということは、この新田が開発されたときに何らかの理由で道を付け替えたものでしょうか。

ちなみに堀兼新田などこの近辺の新田の開発は、江戸時代の享保年間(1716～36)に行われ、三富新田に次いで、もっとも遅い時期の新田開発とされています。

【三富開発の由来】

「フラワーヒル」の信号の東は大字下富です。下富は、徳川第五代将軍綱吉の側近で川越藩主でもある柳沢吉保が、家臣の曾根権太夫らに命じ、藩領の南に広がる原野を開発させました。

三富村の名は『論語子路篇』の次の言葉が由来です。

曰富之、曰既富矣、（いわく之を富まん、いわく既に富めり）
又何加焉、曰教之、（又た何をか加えん、いわく之を教えん）



ネオポリス西交差点
からの鎌倉街道

【柳野遺跡】

2012年の発掘調査で、老人ホーム真和の森の前の道路の反対側に道路の踏み固められた跡と西側側溝と思われる溝が検出されました。また、東の上遺跡と同時代の土器片も確認され、東山道武蔵路であると判断されました。この発見により、堀兼道は東山道武蔵路を踏襲しているという従来からの説が現実味を帯びて来ました。

なお、遺構は埋め戻され駐車場となっており、説明板もありません。



【馬頭観音と新河岸街道】

平行に二つある道の東側の道の交差点の東北の角に街道の道しるべを兼ねた馬頭観音があります。正面に「文政十丁亥(ひのとい)年二月吉日 馬頭観

音 東 古市場道」、右側面に「北 川越道」、左側面に「南 所澤／江戸道」、裏面に「西 八王子／三ヶ嶋道」と、それぞれ行き先を指し示しています。右側面にはこの馬頭観音を建てた人々の名が彫られており、旧堀兼村の人々の手になるとわかります。



新河岸街道（古市場街道）

新河岸川の水上交通が盛んであった時分に古市場河岸へ物資を輸送するために利用されました。古市場街道とも、また河岸場から見た行き先を示す呼び方として三ヶ島街道とも言われます。

【八軒屋大井戸跡（まいまいず井戸）】

堀兼神社から南に伸びる道は堀兼道と呼ばれる鎌倉街道です。この道は東西二本の道になっています。東山道武蔵路であったと言われる道がここです。その西の道を行くと林の中に今では珍しくなった「まいまいず井戸」があります。まいまいず井戸というのは七曲りの井戸とも呼ばれ、深く掘らないと水が出ないこの地方の特徴的な井戸のことです。地表面をすり鉢状に掘り下げてあり、すり鉢の底の部分から更に垂直の井戸を掘った構造です。すり鉢の内壁に当たる部分には螺旋状の小径が設けられており、利用者はここを



通って地表面から底部の垂直の井戸に向かう。深く掘ったためすり鉢状になった内側、ジグザクに曲がったりぐるぐる回ったりしながら水を汲みに下り行くことが名前の由来です。ちなみに「まいまいず」というのはカタツムリのことです。

【堀兼神社】

堀兼の地は承応 2 年（1653）に牛久保金左右衛門という人によって拓かれた新田ですが、地名はもっと古くからありました。堀兼神社は小高い塚状の上に建てられた浅間神社です。慶長 3 年（1598）に松平信綱により家

臣の長谷川源左衛門に命じて建てさせたと伝えられています。

神社の隨身門と二神像は江戸時代後期のものと推定され狭山市の市指定文化財になっています。

社伝によれば、日本武尊が東国平定の際、当地において水がなく、苦しむ住民を見て、水を得ようと富獄（富士山のこと）を遥拝（ようはい）し、井戸を掘らせ、水を得ることができたため、浅間社を祭ったと伝えています。境内にある旧跡「堀兼の井」は県指定文化財であり、「隨身門及び二神像」は、市指定文化財です。元旦祭、春祭、秋季大祭、天王さまには堀上囃子が奉納されます。境内社には、小御嶽神社・下浅間神社・八坂神社・井上稻荷神社・日枝神社・金毘羅神社・天満宮などがあります。

堀兼の井は周りを石柱で囲まれており、口径 8m、深さ 1.5m ほどの井戸の底には方 3 尺ほどの石の井桁が組まれています。残念ながら水は涸れています。

この井戸は七曲井と同様に、いわゆる「ほりかねの井」の一つと考えられていますが、これを事実とすると、掘られた年代は平安時代までさかのぼることができます。

井戸のかたわらに 2 基の石碑がありますが、左奥にあるのは宝永 5 年（1708）に川越藩主の秋元喬知が、家臣の岩田彦助に命じて建てさせたものです。そこには、長らく不明であった「ほりかねの井」の所在をこの凹形の地としたこと、堀兼は掘り難かったという意味であることなどが刻まれています。しかし、その最後の部分を見ると、これらは俗耳にしたがったままで、確信に基づくものではないともあります。

「ほりかねの井」とは武蔵野の名所として知られた井戸で、多く和歌の題材として使われています。

堀兼の井戸の歌を紹介します

武蔵野の堀兼の井もあるものを、うれしく水のちかずけにけり 藤原俊成
はるばると思ひこそやれ武蔵野の、ほりかねの井に野寺あるてふ 紀貫之
浅からず思へばこそはほのめかせ、堀兼の井のつつましき身を 藤原俊頼
くみてしる人もありなん自ずから、堀兼の井の底のころを 西行
いまはわれ浅き心をわすれみず、いつ堀兼の井筒なるらん 慈円
おもかげぞかたるに残る武蔵野や、堀兼の井に水はなけれど 道興准后



堀兼神社参道



堀兼の井戸の案内板



堀兼の井戸



堀兼神社正面口



堀兼神社のケヤキ 幹周：5.1m

【化け地蔵】

水野村開拓後の貞享二年(1685)に45人の村人によって祀られたと言い、通称「化け地蔵」等と言われます。当時の名主牛久保忠元と、村全部の戸数と思われる名が刻まれているそうです。化け地蔵と呼ばれるようになった経緯は幾つかの説がありますが、若者がいたずらに仕掛けたスイカ提灯を見た旅人の話が広がったと言います。



【不老川】

瑞穂町の狭山池の伏流水が水源とされます。そこから北東へ向かって流れ、入間市宮寺と藤沢、所沢市林、狭山市入曽と堀兼、川越市今福などを流れ、林川、今福川、久保川などを合わせ、川越市岸町と川越市砂の境界で新



河岸川に合流します。

1983年から3年間連続で「日本一汚い川」になるという不名誉記録を作った時期もあったが、現在ではその汚名を返上している。市民団体や行政により浄化の取り組みが続いており、多数のカルガモが生息する程度まで回復している。元々の読みは「としとらずがわ」であったが、現在では「ふろうがわ」という読みも一般化しているようで、この川を示す看板には「ふろうがわ」「FURO RIVER」という読み仮名がふられているものもある。
不老川名称の由来：雨が少ない冬になると干上がってしまい、正月には水が流れなくなる。このため全員が1歳ずつ年齢を重ねる旧暦正月にその姿を現さないため「年とらず川」と呼び習わされている。

【昼食】 イアタリア料理店 ろくすけ 12:00～13:00 ☎2959-6771

<http://www.ita-rokusuke.jp/>

【野々宮神社】

古記録に伝えるものはありませんが、社家の伝承によれば奈良時代の創立と伝えられています。大和朝廷が皇威の発揚を図り四道将軍を派遣したときに、宮崎と称しました。奈良時代、朝廷の命を受けて倭姫命を奉斎し、入間路の警備と七曲井の管理に当りました。東海道、入間路には宮崎を姓とした社家が多く、たとえば井草八幡宮の社家が宮崎を姓としています。



本殿の左側には、明治40年に合祀された神社5社の神明神社・八雲神社・稲荷神社・愛宕神社・蔵王神社が並んで建っています。元旦祭や春、秋の大祭等には、市指定無形民俗文化財である入曾囃子が奉納されています。また、市指定文化財の古代甕が残されています。

【七曲井】

観音堂の裏手にある七曲井は、直径が最大で26m、深さ10mほどの「まいまいず井戸」です。

観音堂⇒



この井戸は昭和 45 年に発掘調査が実施され、すり鉢部の上部直径が 18～26m、底部直径が 5m、深さが 11.5m で、井筒部はほぼ中央にあり、松材で組んだ井桁（いげた）からなっていることがわかりました。また、井戸へ降りる道筋についても、その入口が北にあり、上縁部では階段状、中途から底近くまでは曲がり道となっていることも判明しました。しかし、井戸が掘られた時期については特定することができませんでした。それは、これまで何回も修理を繰り返して使用してきたため、史料によれば、最後の改修は宝暦 9 年（1759）となっています。



発掘調査による考古学的見地から解明された七曲井については以上のとおりです。しかしながら、この井戸が掘られた時期が全く不明かという、そうでもありません。それを解明する手がかりは、井戸の所在地が「北入曾字堀難井」にあることです。「堀難井」は、現在は「ほりがたい」と呼ばれていますが、地元では古くから「ほりかねのい」と称していました。文法的にみても堀難は「ほりかね」と読むのが正しいと思われます。



「ほりかねの井」が我が国の文献に現れるのは、平安時代前期の女流歌人である伊勢により、「いかでかと思ふ心は堀かねの井よりも猶ぞ深さまされる」の 1 首が詠まれてから以後で、清少納言が著した『枕草子』にも、「井は堀兼の井。走井は逢坂なるがをかしき。山の井。さしも浅きためしになりはじめけん。」とあり、天下の第 1 位に「ほりかねの井」を挙げています。伊勢の活躍した年代は宇多天皇の在位期間（887～897 年）であったこと、『枕草子』がまとめられたのが 11 世紀初頭であったことを考えると、ほりかねの井は平安時代にはすでに存在していたといえます。

また、延長 5 年（927）に完成した『延喜式』を見ると、「凡諸国駅路植菓樹、令往還人得休息、若無水処、量便掘井」とあります。これは、「諸国の駅路には果物の実る木を植え、旅人に休息の場を与えるとともに、飲み水のないところには井戸を掘りなさい」という意味ですが、七曲井の脇

を通る道が中世は鎌倉街道、古代は入間道（いりまじ）であったことを考えると、遅くとも9世紀後半から10世紀前半にかけて、武蔵国府の手により掘られたと考えることができます。

【入間野神社】

南入曾の入間野神社は、元国井神社といい、御獄大権現とっていた神社です。この神社と金剛院の**入曾獅子舞**は有名で、宝暦8年（1758）以前から伝わるもので、五穀豊穰・降雨のない時の雨乞いを祈って舞われます。毎年10月14日と15日に行われ、**県指定無形民俗文化財**になっています。入間野神社の鳥居の横には**鎌倉街道上道の案内看板**が並んで立っています。



建久2年（1191）の鎮座と伝えられ、当社奉斎の神像には、天正6年（1578）卯月と記されています。旧号を国井神社と称し、後に御岳大権現と称しました。社領として慶長2年（1597）十石の御朱印を賜りました。

明治元年社号改正につき、御岳神社と称しましたが、明治40年5月3日、浅間神社、神明社、天神社、稲荷社を合祀しました。明治44年6月、両村社を合祀し、社号を入間野神社と改めました。

【旧入間村役場跡】

入間村は明治22年市制・町村制の施行により北入曾村・南入曾村・水野村の三か村が合併して誕生しました。昭和29年入間川町、堀兼村・奥富村・柏原村・水富村と合併し狭山市となり入間村役場としての使命を終えました。

一方、入間市は昭和41年に入間市となり、入間と狭山の地名は入り組んだものになった。入間市立狭山小学校、狭山市立入間小学校があります最後の改修は宝暦9年。なお狭山市では地名混同を避けるため旧入間村に由来する地域名「入間地区」を「入曾地区」に改め、現在は一部の自治会名や事業者等に残るのみとなっています。

